

第6回AOA東京大会  
オストミー国情報告 抄録 (第3回)

インドネシアオストミー協会 (INOA)

Ms. Kamalawaty Jasin (INOA 会長)

皆さん、おはようございます。インドネシアのカマラと申します。インドネシアオストミー協会から参りました。インドネシアオストミー協会 (INOA) は独立の機関ではなく、インドネシア対がん財団の傘下の組織として、2000年3月23日に設立されました。こちらにジョン・カルドサ前会長がいらっしゃいますが、映画スターのような方ですけれども、非常に大きな支援をくださった方で、その支援を受けて設立されました。IOAのメンバーとして2004年からすでに正会員になっています。

こちらがカルドサ前会長です。こちらがデータ博士です。私たちのコーディネーターを務めてくださっている方です。インドネシア癌協会でお仕事されている方で、我々のためにもお仕事をしてくださっています。



IONAには現在157人の会員がいます。しかしながらこの数字ですが、実は最新の正し

い数字ではありません。というのは、例えばオストメイトが亡くなった時に、家族がそれを教えてくださらないという状況があるので、最新の数字を掴むことができません。

インドネシアオストミー協会にはジョクジャカルタとバンドンに2つの支部組織があります。インドネシアには32の州があり、その多くはジャカルタから非常に離れた所にありますが、活動拠点はジャカルタに置いています。

2000年以降、フレンズ・オブ・オストメイツ・ワールドワイド (FOW) というアメリカとカナダの団体からストーマ用品の寄付をいただいています。そして寄贈されたストーマ用品は、特に低所得層で装具を必要としている家族に贈られております。皆さんは地名をご存知ないかもしれませんが、西ジャワ州、中部ジャワ州とかスマトラ州、ムサンテンガラ州、西ムサンテンガラ州などにも配布を行うようにしています。そして2006年からオーストラリア協会協議会 (ASSA) からストーマ用品の寄付をいただくようになりました。

インドネシアのオストメイトのほとんどは、医学的な配慮や治療を受けておりません。ET看護師のケアはほとんどありません。このような問題を解決し、オストメイトの生活の質 (QOL) を上げるために、私たちは短期ストーマケア看護師研修会を開催しました。

この第1回の研修会の開催の際には、マレーシアの2名のETナースのお手伝いをいただきました。こちらの2人がそのETナースで、マレーシアからお越しいただいた方々です。ストーマナースと言われているのですが、こちらが研修を受けているところです。



こちらは集会の写真です。毎年オストメイト集会を開いて、INOAにおける役割を確認しています。こちらが1番若いウロストミーの患者さんです。3歳からオストメイト、そして現在は7歳となっています。



次の写真は、左側はインドネシア対がん協会の会長を務めていらっしゃる方でインドネシア副大統領のご夫人です。私と副会長が写真に写っております。

ジャカルタではインドネシアがん財団の中にストーマ外来を開設しています。現在ストーマケアの看護師の数が80人以上になり

ました。そしてその80人以上のストーマケア看護師がインドネシア全土の病院で勤務しています。



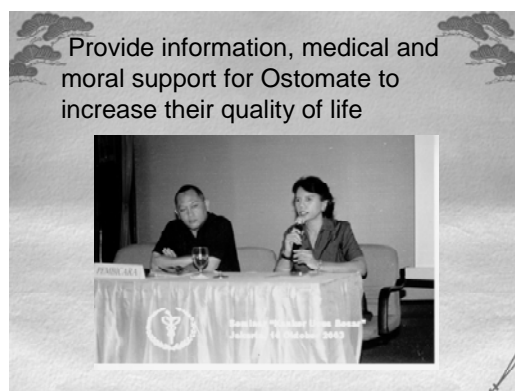
2007年にはインドネシアET看護師協会がET看護専門の学校を設立しました。

2008年における活動ですが、まず定例会、こちらは最低年に4回開催しています。この定例会ではお互いの経験の共有、情報の交換が主な目的となっています。それから毎週オストメイトのために装具をお届けしています。ストーマ袋、付属品をオストメイトのためにお届けするというしくみです。



インドネシアオストミー協会の活動ですが、ほとんどの会員はかなり生活水準が低く、所得の低い層ということになります。そこで、確かに他の国からいろいろな寄付をいただいているのですが、しかし、バンドンのほうで

は更なる支援をしようということで、手作りの装具を送るようにしています。つまり、生活水準の低い、所得の低い層に対しては無料でストーマ付属品を提供しているということです。私たちの自費でということになります。



インドネシアではいろいろな問題に直面しています。多くの会員が参加できる会議が組織できないということです。というのはほとんどの人が仕事を持っており、低所得者も多いということ、会場までの交通費が負担できないという問題があります。あまりにも都市から離れた所に住んでいるということで、このジャカルタ以外の住民にとっては、ジャカルタに来るまでの交通手段が非常に辛く、身体に響くという問題もあります。そしてまた外出する勇気が無いという人もいますし、他の人に会えない人もいる、更に外出する場合には付き添いを必要とする人もたくさんいます。

私たちは将来なにをしたらいいのかということですが、我々はインドネシアのあらゆる州に支部組織を置きたいと思っています。そしてオストメイトのトレーニングを進めていかなければいけないと思っています。新しい患者やオストメイトに助言できるようにと

いうことで、オストメイト同士のトレーニングを行っていくということです。また、例えば同じ年頃であるとか女性同士、男性同士の支援を進めていきたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。

## 司会（高石）

カマラさん、ありがとうございました。インドネシアの場合には私たちよりも大きな課題があるということがよくわかりました。

カマラさん、オストメイトの皆さんの福祉を推進していくために、ますます尽力されますようお願い申し上げます。全てのアジアの友人が、カマラさんとインドネシアの友人のために尽くしていきたいと思っています。

